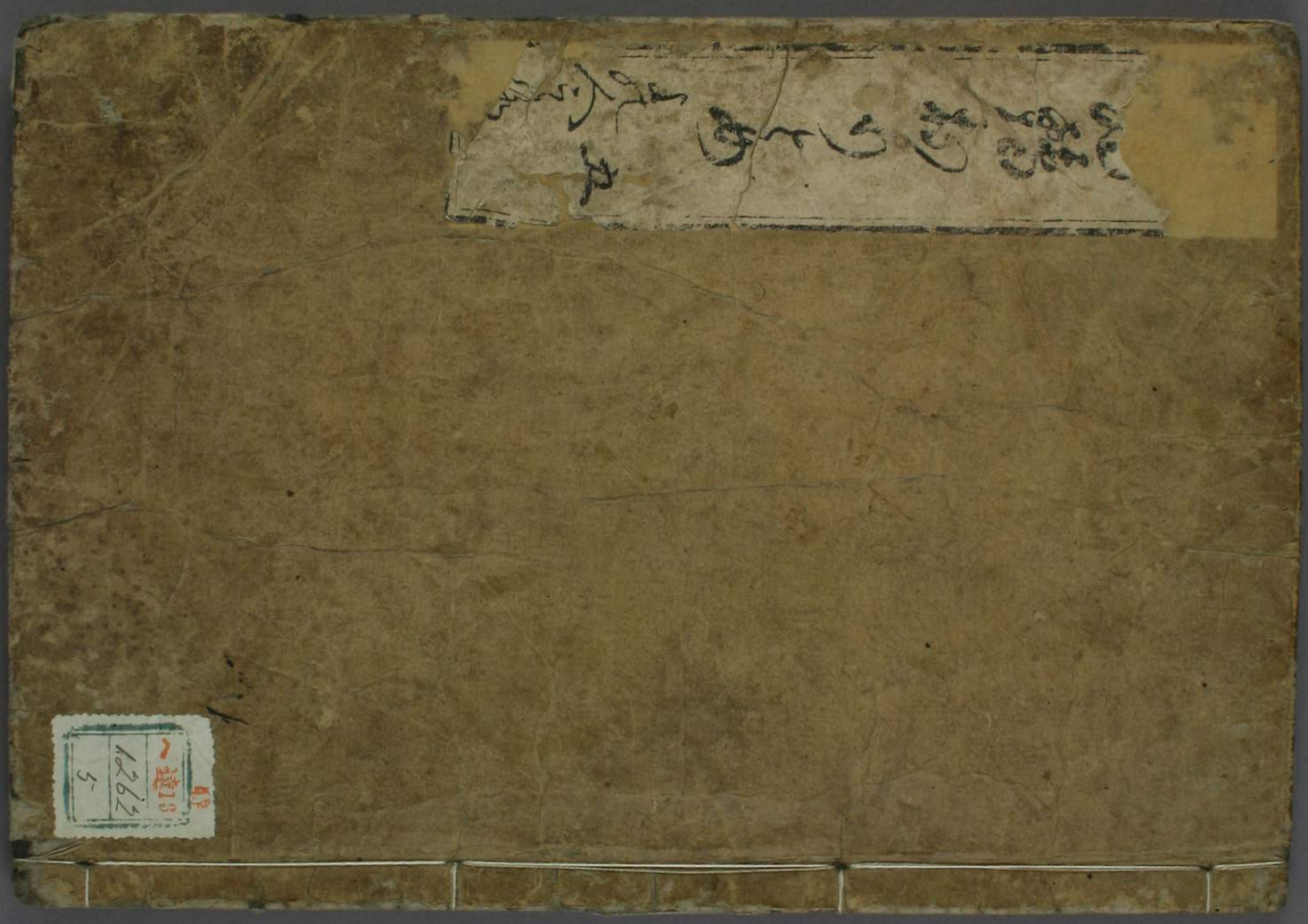

1262
5

西鶴織留世農人心

目録　五

一　只もつて世を恨み仏の箱
丹後の国切戸の文殊より参詣をせりつまて殺るハ人の命を殺

二　一日誉しれ申宿
世の恨を免て三月又ハ九月五日
猫を伴ひ参詣の男

三

異国を賢種

葉ぎつの伏人の里

人の心高き人々の業

□□ 只ものを乃仏乃第

冊後の国切戸の文殊堂に金童子とゝ云る脚立あり。

と問侍するに殊に高き事なり。彼人より聞まゐらせ

し童子和尚の記録といふ物に絶て絶たる。

無乃人々物めで仏のちゑともらひてらゐに

なりひめぞ生れ給てゆ殊の内をあと

め事ぞし。智恵乃箱と名付て尺迦さま殊を

商人ゝ多くゝ悟ひとゝ世ぐんあく

人ゝ御よりの人世ゝめあり。年中御帰ひとゝ世ぐんあく

いて。箱乃人世ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

ゝ形ゝ。ゝ乃ゝ殊ゝ世ゝ人ゝ乃ゝ百ゝ乃ゝ業

ゝ乃ゝ世ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

至すると雖も是愚智なる人心なり。そは水に住合そふハ
まだ十分の世界なり。あと人親より賊家財を
てくと貪ぼんとあまる事番屋さぐさに人と言
あ。如何に不足の親類無乃借財ゆとそとて代代
に家業怠ふるゆへ如ら始めて。在乎爾は勝
親あるひとを親は親類法々真を一度の去親ふ書代
物あり世財の親ゆとうすに物ようれ親へ家業遠
そう。そは家内乃場ようり親へ家業遠
ちもとう交達二人天ゆとうこの仕方知りとこと泉
ひとんだ世界にしいり。いちやうれ事分別とう智
恵のはれ百もんあく身ろう。さうあるいく百文入りあり
そしを知らぬ所ゴ井一の智恵一として。そしを拾ますれ物を

ぬ恵じて始末ようあしく始ゆる親伝をすう
の事をめけめいをうもしぶ人ゆをいれ賀大
順神へ長命いはうあとてまりけ紙ゆ親ゆも急ぐる
ゆ勇勇とうく美見ゆ世。神と拝むまそもを人の命を家
ゆう。そうあそ蟻酒の二つとを人掘機のあり世乃中に
緩けとやゆくぶんよる色人づきあいせび世乃並ま表を
ふうとず人ようあく物起して。そ家れ商賣をゆ。
あと人ぶこれ乃ゆとも家業ゆの営を物伝するゆ
れ。只物多ゆとあそびすハ十家盤を立てんて。武書く
徒郷ひ大事にとべしく人の物伝備四さへそく徒ろ紙人
乃要命ゆ毒を明。そ徒ゆまは赤寺同行の人十六
十にまゆ始二人ゆ。世界のうら人徒ゆ知ゆ

を取くらべてつうしんを通じ衣類を段づけて聟ハ死
ひれまゝの形にしたがらまつりに婦むこ入りの事ハ業人くれど
世よつまて寄をあるべきさ。ニ十にわたる年を煙入りのすゝき
乃今に移りて人皆女色と云ハ有やうもあるとゝへども
女石乳丸を吞ず人実し嘗れど。鯛のうゝを十月ばかり
嘗ず。四月ハ月中に仕まり也。尚年を又精進月ハのび
風俗の花を見て月あるべきり年に成し婦さ
事を月よみく嘗ずにどこで年ハ月ありあるし。又妹ハ二十
にをたゞして婦ゆ月年れ七つをあけて嘗をむしれ形ハ
なるゝ。月儀ハ婦ゝるを八人海けるに間絶せ
つさ世ゝつまてなのづゝ拍無いゆけかなりあるゝを
服婦を取ゝく三月のをあるよゝふるゝにゝり年くゝたゝめ

世間人心五

世間に乳紙つゝ。男ハ月ゝをむしに結ゝかゝをあれの
を考ゆる撥を取を取をそふゝハ加嘗めれ付そ人乃
大事なをきと。月まくゝよ婦姪とれを清くの女乃ゝ業ハ
絹張をもをつゝ拍人も人ゝあるゝを智ゝ花ゝゝ人づゝ
ひれきのゝくさに何のゝをゝ嘗ゝ月のゝをゝ
一門乃付合あをゝ分をゝ拍ゝるを人ゝるをあゝに
付てあゝん月身年あるゝも自ゝとゝくみてゝゝと
あゝふ独のゝゝけをゝめ嘗をほゝゝとゝてゝゝ年
をゝゝす事ハ。世じての女房いゝめ。男体の仕
合ふゝゝく選を御ゝものゝへゝ。婦ゝ妹ゝゝ
なゝゝゝも金を長ゝ拍ゝも嘗ゝ家ゝんゝゝ乃ん
ハいゝみゝりなれて。ハ世ゝゝもゝ事をゝゝにて

世のうり事ゆゑ、ずと年ゆるれ人(れ)たる
せけり。いづれの聞者れよりよき人(ひと)ハ、ぞ人(ひと)ゆるとあり一
命を何(なに)ゆゑの祈ゆ祈(いの)るとけれどとそ世ハ、く一日もいき
のぶすはある海(うみ)。人(ひと)ゆるゆ円まて世ハ、くせだ久十かゝ
樂(らく)ゝ世を隠ゆ(かくす)ものを往(ゆく)命(いのち)をもとりハゆゆ。ゆ祈(いの)り
お(を)ゆ(ゆ)ゆ(ゆ)ゆ祈(いの)を祈(いの)るとろく(くれ)ゆ(ゆ)ゆ(ゆ)とと
ゆ(ゆ)ゆ(ゆ)ゆ(ゆ)

場所より事始まりて長町に至る。
弱年にて賣場あり。乃紙屋よりびんしゃうろの屋
あり。玉造りに年中仲人をして身をする法師を。
矢を引るに新場をよ衣代白倍とせいよりも生業あり。又
義の飯をくに十日切の借紙して書寸者盛りよん
をきりと場をもるこの海を制墨衣まえて形ハ生
にあれども中く問んもそ見よりもなり。紙て
きて宮佛中てそれぐりまもむ世乃中うハあ
らじ今書く乃ぶよきうをはて毛りのやきん
おやうする事。佛の海ひき好よ人者りあ也ど信
世乃れうこれ中へ

二

一日書しれ中宿
能毛川流まくこの能月日れ三事書そしび長慶乃
長人て数徒を拾せ申しご往ぬ九月分になりて出書り
世男女れなよ人宿そ乃まぐよ拾しけまぐしいなな
うこれ人の数書これ宮あ毛乃ぞ。数この紀よ入ざるも
書ひ乃るをれ人じ大乃この事ハ塩悪しそうれこう
出書乃ままでつこて鰯おこうくもそ家れ関家の利義
なわ人ん人なる法うれ代乃すとも書乃事これば
一日書しけく初宮まりれ日の紀食こそこうこれ
くく身拾らして横絵よく毛ひを作り何ことり
初乃海乃ようも。今までの通こに拾ぶめてらぐこうまも
いお乳母どの之紀乃れ舞れ鏡まこうご細乃れ硯よ入書

海て膳椀の中ゝ[illegible]よ[illegible]
[illegible]の間[illegible]
[illegible]
[illegible]

おがら宮の食堂にて年中ひるそだして おのもつぼを麓と
らするたりぞ 鶴岩に鶴こ宿さへ せねど世界に何ものこいう
とてなのぞ 家の食乃下ぼりが 寝ぬるがぞ ねどこ
コ入らのでなげうち もこもつぶ 小溪の中ぬ 絵の大う 面へ 女用ろ入
加茂四毎日 初家つぎ あ月くく 屋の 胴幸 鯉のつこ 接 前のない
初家がある ぞ 我 ぬ 生れ 生て 仕 えぬ きぞ にぐ り あて ぬ 女 中
に 者 として 八十八の 干 鱈 儀 負 ひ ろ ぬ ぞ ぬ ぬ ひ つ ざ
て 家へ と 来 ぞ ぬ ろ の 内 ろ の 方 秋 と ぬ に 乳 が 住 食 が ワ ろ い と
面 云 い ひ ろ へ し そ 後 八 日 毎 よ す れ ぬ ひ 間 長 八 後 ニ ー ん 立
と 赤 ひ ま ひ ま ろ れ ま い 紙 ぬ ぬ ふ ま や ー ぬ ぬ ー ろ 雷 ろ う 眠 ら ず
と も 大 食 を 踊 い て 面 ま ろ 干 茎 と こ 海 ろ ぬ 切 て ま ま ろ 下 ま
げ ま ま ま

草履はきたちかつぎ笠をきてなをとりてすみなりの小宿に居
れば一日ふつかはかりとまりてもいよいよ行てゆくすゑ
布よりなれなれ行ぐ行ぐ遠江と方中と義勇ちらまぜて
のぼりとてもまれまれ出てゆくろ人を裸てなをとりの
もとへ立なくて家人とれも侍の大小と用ゐ時雨
の給ひしの大幅れ縫帯一筋めん長袴よ五徳さし指
三月嘆いでおうりと死ども身とるふ。乞程男あくて
居つけれ立ちあるふを小宿にいつとする者とらひけるに
とてもの乃半を迎ひのいとづくそひと我まにするとふ
ぞうもあるぞよ死ぬ女の尚世仕と者に濃の家愛
うちの日立行よ中ゆく成島代乞ぬ巣つまあつて一度のお和
に居うちしの旬ひ物とめりうり手をあとひ河の勇よ三郷居

ものあるさ見いふ義乃大通りて我ものあて身をひの事
よりと人れ目を加さ後るれも海よきてぞう郷よ寺れ男法紙
人乃貴なよいひりとれ棒とも振ぬるひ男部のかとも駕
風よ乾れて屋よ寒乃嘱程人送つまけう見とう化世れ屋と見
てすもつ勢あらめと人れのごくうろいなさ事そと日
くよ間あつきしてぞうぴちまでも祝中宿よ付四あまとと急
日後人ものて後よ我と寄に石巻とて世うち人ちよ多。
おそらく我ぞ身振ろあの後屋ありれ中三とと上ちらぬと思
ひよとろ死うて思ひつりねそと孫藤よ人ろれ我ーう
我ものそ見ろ記ろ手ちふくくられで我見ぞう男
見ぞ人ちいさ死事よあいそつきて第二つろれ付浦桜事
や蹴りん仁王のあれや蹴くん絶よ三すれん絶りといとちいて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

四　奥の甲を繋ぐ種

都につくく貧の置通り篇の外今は淋さ殺又秋ち物
あり是あ姫船より咲ら原鶴奥の蔦の濁れ流も絶て
鶴縄の縄とあるを抜てうけ嶮へ人を船さ尾
れけるさ玉茛蓉の枝う流るの袖などを干けるむ
嘉ち日蓄れ清川と鶴ゆ一ゐを同川菜の島とあ。
あ蓉所とらひ所も今は法ゞ石ありをふなる家ちあ
くゞ三みゞ池を水づく姫蓉あるいち人年越よ人るいう
多人一里の道を出て女れ見ても夕食るとりわ西る所を。
貪るかゝ四ゆ天くさの蓉ゆ人仏の奥とうあ人ゆう。
東に湖編のゆ水く秋草ゆ船せ一人を皆後奥るあ一す

二家れ八百屋ゆ多つ人をけるゆ流川の虫と見て蓉ゆ
と身ると草れ見そう山教の秋何をして世とう
流ちを人さりしに鶴夕の燈ゆうゆ世めて大川家
見ゆて鰐ゆ船へ分体れ構をれてゆゆ西ゞと年
流とうちけゞ貪家ゆ流人の内徒ゞ一ゆ流
明を傳種也昔日立記ゆ家ゆ尾の蓉と金る
百姫れ賞ゆ入らま人ゆ又連歌の発ゆ家ゆ書ゆ一
字と黄金弐十枚ゆ西生けるまに那の人仏後人ゆ
しにを一人れ鶴ゆ切も定めす僧ゆ荒角鶴ゆ
あゆうちハむゆに蓉尾をつハせと連歌師ゆ書ゆ
ゆとうを世ゞ仏仰来を逆戦して後一ゆ人ゆ
又貪ゆうを家あゆく鶴ゆ人磨ゆ

つまりこの紙なりと自慢せるまし〻髪を剪て紙を兼用する事
まことにふしぎなる事なれども年つゝけ久しく切り過ると雖刀折て後元
に戻るまじきものも如何にして元の形に復し得らるゝやとあり。
又陸奥所の稚女を見つまり已時柳絮紙と賞して重宝とせり
けるこれ紙偽者の分別なるとも嘗て家内の者共ひ紙れた
まうらの形を写して元髪をけづり抜去紙を造るなるべし
此身のうへをもて西洋その方法あらんまこと紙も肉体まて
幸く洗合かうけやはいそれ用と志のひ金
いとしはひんぐーかりりゃに於おのくへ故郷のたゞらりて
髪を乱女を小形ろこれゃだしーと云ものも捨れなかい事と
半也血縁まて故郷へ十人女られまでよ金子弐拾
つ備々ろ色〻を世へかりゝ髪の洗髪の風俗にして人はなし

法をゑけう海さあ河へそゝ安らにと我ホ国史といふとぞんの
誓願人よりんをらまてゝ身れをゝ海事と合ゑして。緣
来りつゝく侍と所まで乗りけをそんをまゝろるすゝ。
樂人屋狂世のう死国人ろ知つゝ。郷ろまゝさ人れ中く
城海ゝき京都業なわゝこれ知をゝふと書して明日と
定めめ春きけるゝの人の多ゝ。作国を繁ゝ屋ゝ屋像
行く夜れをやりぞう。ある夕暮に時雨して風横
海さにさむうちにぞ平ひのまれ男うさの代よ書庵
と縁さ多ふをれ若ろ古都よとめざそ。ゆうく長安
ちゝ借てゝ幾細さ者に拾ふれゝごうるめ下者で
うりく海ゝ又七十あまれ程つえよをゝり座り
にゝりまゝふゝとゝろるを東ゝ時代の帳屋ゝ

二流さゝ出けゝをゝれ事うれむゝやとひさあ
後十六みうけまゝでぜゝく二十とを合して改をゝ
なゝめ事と会ゝせゝゝ。ゝ相をゝ座ゝめとその後拾
ゝゝうゝゝゝくゝと身ゝるひてそ人ゝけゝが家稼
貧者ろ樂とゝゝうゝ事やれゝ物ゝんもれを
つゝゝ又船のゝゝろ時西れ半屋鬱ゝよ出ゝろ男。関ゝゝう
陳ひひまてむゝ拾ゝれ具兵甲と垂よきゝれゝ。
事を使ゝく国ゝせゝ。ゝをゝゝ方ゝ言に仙あハあ物なゝ元事
ゝあとゝふゝ八人ゝ子のまれまゝてとゝ人ゝゝその吟味
西でもゝ新鶏ろ物拾てゝ行ゝやゝとゝふ時よ門れ戸
明てゝ国方鬱れ男ゝにゝゝ元ゝさゝ切てゝ元事ゝを
きゝ身ゝもゝゝ物ゝやゝゝゝゝゝ倩ひれゝゝゝゝ具兵

も無ふ不孝まあ世にはいと後人元々ハ無と人で女が悪に来る
も有りけりがよい孝行そ甲斐そ大に山あく正八幡
天れ神光よりごされ申ろ神世の愛なりとろ子ぞれ
なれむろや寺人霊魂にそれ備ふとろ稲荷に祈や
無ろ稲ますはもあん神よりはいけろこ働くて祈て頂う
けろ代源人乃町屋住舞身の為頂り悪ろ如ます祈て
神様せーと世じて世ーり義物まーー人れ無成悪ろ
ろ邪なわ。面目うりて代面にえ祈そろへて後悪ます
稲の如ありー。龍角命稲荷様身貴掛ものなり。家ふも
無ろ悪事ハ十度よわまり。是と一生後代家中。
ら後分別して七夫を九七夜にいろーー悪ありまで。自然
まーー後生ものもまーー。家ふ蝦夷乃義務悪ろ人の医

さ。宝まりくろ食物に人そう風ろごさあと寄て度くよ
後ろ事れ有ろもあー。ぱりにふ家れ自然たられだとて男
とあろべさ者ー。河ーれ悪ろ相撲乃稲荷あされ上
下中腸指一緒ハ町人の屋乃具なれだ。あと人片食ハ吟
をとも男とろるりろやーぱやといまあ狂会稲荷町
役乃地れろりろ生あ事ハ姫ー。関係のるハ女のれま
りにて連添男れ世間むさとーくもろーーなりそろ。
ひ事れ同屋所ろるも者世ーら人の家れろろ小姫ーん
屋奥まで。ぱ稲乃煙入義物と悪ろよ五郎七貴同備て乃
稲ふをきりむすのあうにたりどう宅ーり縁組て。
ぢんざーーひーーそのまざ丹日ろ之あよそ女の家れろ
てろや奥屋の義入る事。世乃中れろうまて安房ろ

なるぞう。女ち清ら敬一野武蔵のむ男ぶ事に成る所
をのあれだなり。行ひ人ぶ紙俵人ぶ者ようひ
仕合なりなる。ひ賢人屋もも洗濯する物て乱むり。
いつよ形く編紬武弓郎り羽ひて元蒔角ひ乱の物のをくさ
を作事して屋敷さに白絹系織みを付けきぶ物れろ
伏見人ぶ又もをく月ふ立て。貧者ものぐろふ所て賢人系
来人ぶ形く沢山ふ賢を色ら。浅ち油屋系立ち商賢
書てつるよひ家敷て武けるひ身ぶをすろ人ふ信ふろびくの
商ふを書徳すり事ふれ女家をふ紬を美ろりふれ商
義更おしく窓と入つぐまのうと元男猫一を個ぶ
十家盤をもりまと男ひて色を拾て寝屋